歴史をさわがせた孝謙天皇

2020 年 12 月 10 日

我部山　民樹

1．はじめに

孝謙天皇は重祚（ちょうそまたはじゅうそ、一度退位した天子が再び即位すること）し、その後は称徳天皇と呼ばれる。

718 年誕生

770 年 8 月 28 日崩御

父;聖武天皇

母；光明皇后

史上最高と言われるほどの黒いうわさがつきまとう。最大の原因は宇佐神宮神託事件だろうが、これにからみ、後世、面白おかしく語られている噂は本当だろうか？孝謙天皇の真意はどうだったのだろうか？道鏡は本当に権力欲の権化で天皇の地位を欲したのだろうか？孝謙天皇の黒いうわさは神託事件も含めて、いくつかの出来事に直接的、間接的にかかわったことによるものだ。勿論、全く無関係の出来事もあっただろう。

女性天皇としては史上 6 人目であり、推古天皇からおよそ 120 年の間に 6 人が即位しているが、孝謙天皇の後は 17 世紀の第 109 代・明正天皇までの長い間女性天皇は擁立されていない。黒いうわさに教訓を得た結果だろう。

また、天武天皇には多くの皇子がいたが、孝謙天皇が天武天皇系最後の天皇となってしまった。何故だろうか？

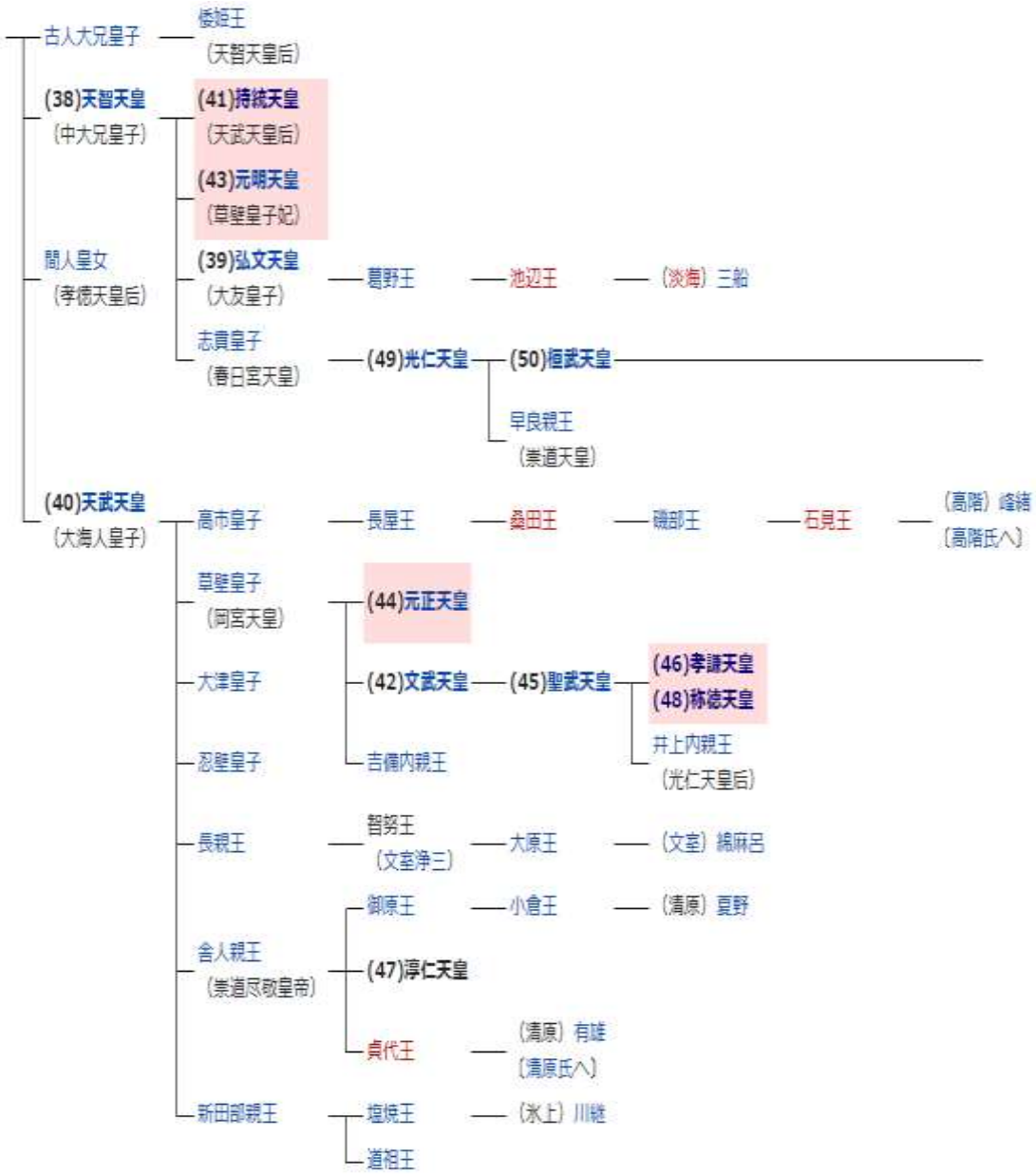
女性天皇は基本的に先代の皇后（未亡人）、もしくは生涯未婚を通す女性に限られ、幼い息子や弟の中継ぎであった。未婚で天皇に即いたのは他に元正（げんしょう）天皇がいるが、たまたま甥の皇太子・首皇子（おびとのみこ、のちの聖武天皇）が幼かったので中継ぎとして天皇に即いたが、中継ぎではなく未婚の女性皇太子に即いたのは孝謙天皇だけである。20 歳の時に立太子しているが、恐らく弟・基王（もといおう）が夭逝した 14 歳の頃に申し渡されていたものと思われる。生涯、恋愛も結婚もかなわないし、一生独身を強いられたことが悲劇の始まりであり、些細なことでも卑しい名前に改名して、厳しい処罰をするという性格も絡んで、その後の様々な出来事に翻弄され、黒いうわさが付きまとったのだろう。

勿論それだけではなく女性の向上に尽力し、多くの実績のある有力な女性に位階薫等を与えたことでも知られている。

主な出来事を時系列にまとめ、係累を整理した上で、黒いうわさ、宇佐神宮事件、天武天皇の皇統が途絶えた背景を調べてみる。

2. 当時の歴代天皇

系図



この時代の歴代天皇（629 年～806 年）

	男性天皇	女性天皇
第 33 代 592 年～628 年		推古（すいこ）天皇 父親;欽明（きんめい）天皇 母親；蘇我堅塩媛（そがのきたしひめ）

		夫；第 30 代・敏達天皇 同母兄；第 31 代・用明天皇 異母弟；第 32 代・崇峻天皇 母方の叔父；蘇我馬子（そがのうまこ） 崇峻天皇は蘇我馬子に暗殺された
第 34 代 629 年～641 年	舒明天皇（じょめい、田村皇子） 祖父；敏達（びだつ）天皇 父；押坂彦大兄皇子（おしさかのひこのおおえのみこ） 母；糟手皇姫皇女（ぬかでひめのひめみこ、父；敏達天皇）	
第 35 代 642 年 2 月 19 日～645 年 7 月 12 日		皇極（こうぎょく）天皇 父親；茅淳王（ちぬのおおきみ、舒明天皇の異母兄） 母親；吉備姫王（きびひめのおおきみ、父；桜井皇子）
第 36 代 645 年 7 月 12 日～654 年 11 月 24 日	孝徳（こうとく）天皇 軽皇子（かるのみこ） 父親；茅淳王 母親；吉備姫王	
第 37 代 655 年 2 月 14 日～661 年 8 月 24 日		斉明（さいめい）天皇 皇極天皇の重祚
第 38 代 668 年 2 月 20 日～672 年 1 月 7 日	天智（てんじ）天皇 父親；舒明（じょめい）天皇） 母親；皇極天皇 子女；大田皇女 持統天皇 元明天皇 弘文天皇 志貴皇子 新田部皇女ほか	

第39代 672年11月9日～672年8月21日	弘文（こうぶん）天皇 大友皇子 父親；天智天皇 母親；伊賀宅子娘（いがのやかこのいらつめ）	
第40代	天武天皇 父親；舒明天皇 母親；皇極天皇 皇后；持統天皇 同母兄；天智天皇 子女；草壁皇子 高市皇子 大津皇子 舎人親王他	
第41代 690年2月14日～687年8月22日		持統（じとう）天皇 （天武天皇の皇后） 父親；天智天皇 母親；蘇我遠智娘（おちのいらつめ、蘇我倉山田石川麻呂の娘）
第42代 673年3月20日～686年10月1日	文武天皇（もんむ）天皇 祖父；天武天皇 父親；草壁（くさかべ）皇子 母親；元明天皇（げんめい） 夫人；藤原宮子（きゅうし、藤原不比等と賀茂比売（かものひめ）の娘） 子女；聖武天皇	
第43代 707年8月18日～715年10月3日		元明天皇（安倍皇女（あべのひめみこ）） 夫；草壁皇子（天武天皇の次男） 父親；天智天皇 母親；蘇我倉山田石川麻呂の娘・姪娘（めいのいらつめ） 兄；大津皇子

		子女；元正天皇 ；文武天皇 ；吉備内親王（草壁皇子と元明天皇の次女、長屋王の妃）
第 44 代 715 年 10 月 3 日～724 年 3 月 3 日		元正（げんしょう）天皇 父親；草壁皇子 母親；元明天皇（安倍皇女） 弟；文武天皇 未婚
第 45 代 724 年 3 月 3 日～749 年 8 月 19 日	聖武（しょうむ）天皇 父親；文武天皇 母親；藤原宮子（きゅうし） 夫人；光明皇后（こうみょう、不比等と橘三千代との娘） 子女；孝謙天皇 基王（もといおう，母；光明皇后） 安積親王（あさかないしいのう，母；県犬養広刀自） 井上内親王（いのうえないしんのう；安積親王の同母妹） 不破内親王（ふわないしんのう、井上内親王の同母妹）	
第 46 代 749 年 8 月 19 日～758 年 9 月 7 日		孝謙（こうけん）天皇 父親；聖武天皇 母親；光明皇后 未婚
第 47 代 758 年 9 月 7 日～764 年 11 月 6 日	淳仁（じゅんにん）天皇 祖父；天武天皇、 父親；舎人（とねり）親王 母親；当麻山背（たいまのやましろ） 子女；安倍内親王	

	甥；和気王	
第 48 代 764 年～770 年 8 月 28 日		称徳天皇（しょうとく）天皇 （孝謙天皇の重祚）
第 49 代 770 年 10 月 23 日～781 年 4 月 30 日	光仁（こうにん）天皇 祖父；天智天皇 父親；志貴皇子（しきのみこ，天智天皇の第 7 皇子） 母親；紀橡姫（きのとちひめ） 子女；桓武天皇 早良新王 他戸親王ほか	
	桓武（かんむ）天皇 父親；光仁天皇 母親；藤原乙牟漏（ふじわらのおとむろ、藤原良継娘） 子女；平城天皇 嵯峨天皇 淳和天皇 伊予親王 葛原親王ほか	

3．孝謙天皇時代の主な出来事

〇左大臣長屋王の辛巳（しんし）事件
〇長屋王の変
〇皇太子交代事件（道祖王→大炊王）
〇橘奈良麻呂の乱
〇藤原仲麻呂の乱
〇淳仁天皇（じゅにんてんのう、大炊王）の廃帝
〇和気王（わけおう）の謀反？
〇宇佐神宮神託事件（道鏡事件）
〇氷上志計志麻呂（ひかみのしけいしまろ）の変

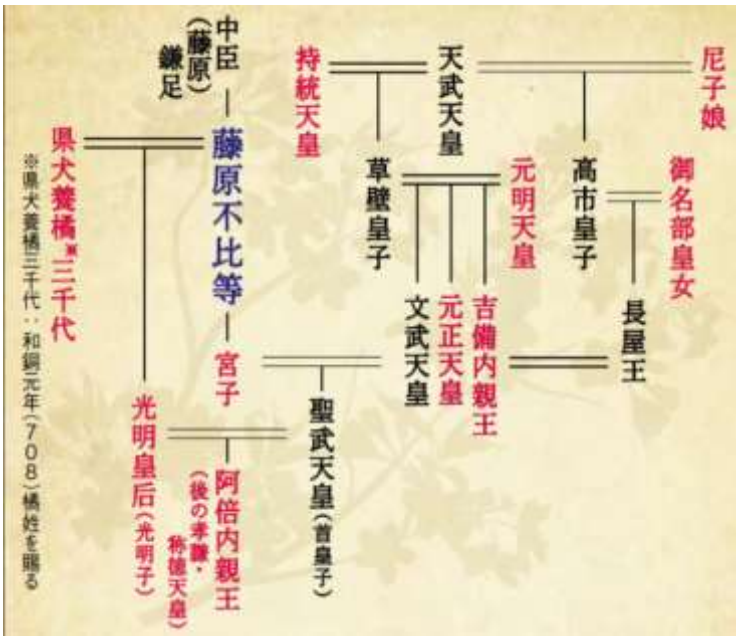
700 年	道鏡生まれる。
718 年	聖武天皇と光明皇后の間に安倍内親王（あべないしんのう、のちの孝謙天皇）が誕生。

724 年	長屋王辛巳（しんし）事件 聖武天皇が母親である藤原宮子の権威を高めるために「大夫人（たいふじん）」の尊称を与えるという勅を出したが、左大臣・長屋王の異議で撤回させられ、「皇太夫人「こうたいふじん」」に改める。
729 年	長屋王の変 国を傾けるために左道を行っていると密告され、兵をさし向けられ、自害する。（藤原氏の謀議？）
732 年	聖武天皇と光明皇后のたった一人の男子・基王（もといおう）が夭折する。
738 年	安倍内親王が立太子する。
749 年	父・聖武天皇の譲位により、即位し、第 46 代・孝謙天皇になる。母・皇太后が孝謙天皇を後見し、皇太后の甥にあたる藤原仲麻呂の勢力が急速に拡大。
756 年	聖武上皇が崩御。遺詔により新田部（にいたべ）親王の子・道祖（ふなど）王を立太子する。
757 年 4 月	皇太子にふさわしくない行動があるとして道祖王を廃し、舎人親王（とねりしんのう、父・天武天皇）の子・大炊王（おおいおう、のちの淳仁（じゅんにん）天皇）を仲麻呂の強い推挙を得て、自身の意向で皇太子とする。 【皇太子にふさわしくない行動とは ・上皇の喪服中にも関わらず、みだらで勝手きままな気持ちがあり、諭しても悔い改めることがなかった。 ・聖武天応の喪中にかかわらず宮中の女官と密通し、宮中の機密を巷間にもたらした。 ・夜中に勝手に東宮を抜け出し、私邸に戻った。 ・自ら、「自分は愚か者で皇太子にふさわしくない。皇太子の重責には耐えられない。」と述べた。】 大炊王は仲麻呂の早世した長男の妻の再婚相手。
757 年 7 月	・757 年 7 月、山背王（やましろおう、祖父・高市皇子、父・長屋王）が‘橘奈良麻呂が仲麻呂の邸を包囲しようと計画している’と孝謙天皇に密告。いち早く察知した仲麻呂により関係者は粛清され、仲麻呂の権勢はさらに高まった。 山背王は特進し、藤原弟貞（おとさだ）と名前を変える。 【橘奈良麻呂の乱】

	女性皇太子に批判的。仲麻呂の急速な台頭により、橘氏の勢力が衰退してきたので、仲麻呂を除こうとして謀反を企てたが密告され、察知した仲麻呂により滅ぼされた。
758 年 8 月	孝謙天皇は病気の光明皇太后に仕えることを理由に淳仁天皇（大炊王）に譲位し、太上天皇となる
760 年 7 月	光明皇后が崩御する。これを期に孝謙上皇と仲麻呂・淳仁天皇の関係は微妙になっていった。 淳仁天皇の治世となると仲麻呂は天皇第 1 主義になる。女帝は孤独感を深めていった。
761 年	平城京改修のため都を一時的に保良宮（ほらのみや、北京）に移した際、孝謙上皇が体調をくずし、病に臥せって保良宮に残った。孝謙上皇は看病に当たった弓削氏の僧・道鏡（禅師、高徳な僧）を寵愛するようになった。
762 年 6 月	孝謙上皇は 5 位以上の官人を呼び出し、‘淳仁天皇が不孝であるとのことで、仏門に入って別居する。国家の大事である政務は自分が執る‘と宣言した。淳仁天応が仲麻呂の意を受けて、孝謙上皇に’道鏡を除くように‘進言し、怒りを買ったことが原因とされている。 道鏡や吉備真備（きびのまきび）を要職に就けた孝謙派と仲麻呂‣淳仁天皇との勢力争いは続いた。
763 年 9 月	道鏡を少僧都（しょうそうづ）に任じる（僧正に続く地位で、大僧都、権大僧都、少僧都、権少僧都の 4 段階がある）
764 年 9 月	藤原仲麻呂の乱」 道鏡や吉備真備を要職に就けた孝謙派と仲麻呂‣淳仁天皇との勢力争いは続き対立を深めていった。仲麻呂は軍事力の掌握を企てたが謀議を密告され、捕らえられて斬首された。淳仁天皇は廃位され、淡路国に流刑された。孝謙上皇は復帰し、第 48 代・称徳天皇となる。
764 年	道鏡、僧籍のまま朝廷の最高位である太上大臣禅師に任命される。道鏡の弟・浄人従八位上から従四位下に急速に昇進し、親王国・上総国の上総守になる。（親王しか就けない役職）
765 年	道鏡の故郷・弓削の地に「弓削行宮（ゆげのあんぐう））」を仮御所として設ける。称徳天皇が 5 日間滞在し、その間に道鏡を法王に任じる
765 年	和気王の謀反？

	和気王は舎人親王系の後裔で唯一残っていた皇統。 祖父；舎人親王 父親；三原王 叔父；淳仁天皇 母親；不詳 ・「藤原仲麻呂の乱」のときは、仲麻呂が軍備を整えていると事前に上皇に伝える。その後、公卿に列せられる。 ・淳仁天皇の廃位にあたっては中宮を取り囲む ・765 年、皇位を望んで謀反を計画したが露見して捕らえられ、配流の途中に絞殺される。
765 年 11 月 10 日	淡路国に配流された廃帝が崩御。（謎の死を遂げる）
768 年	道鏡の弟・弓削浄人（ゆげのきよひと）が大納言（太政官の次官で大臣に次ぐ官）に昇進。
769 年	弓削浄人が従二位に昇進し、太宰師（だざいのそち、長官）に任命される。 「宇佐八幡宮神託事件」が勃発。弓削浄人と主神（かんづかさ）の中臣習宣阿麻呂（なかとみのすげのあそまろ）が、「道鏡を皇位に就かせれば天下太平になる」という宇佐八幡宮の神託があったと称徳天皇に奏上した。 称徳天皇は喜び、神託の真偽を確かめるために和気清麻呂を宇佐八幡宮に派遣した。最初、側近の尼僧・和気広虫に命じたが、広虫は病弱を理由に弟の清麻呂に代行させた。 清麻呂が持ち帰った神託は「我が国は開闢以来、君臣の分定まれり。臣を以て君と為すこと未だあらざるなり。天津日嗣（ひつぎ）は必ず皇諸を立てよ。無道の人は宜しく掃き除くべし」 この神託で道鏡は天皇に就けなくなった。 怒った称徳天皇は‘清麻呂を別部穢麻呂（わけべのきたなまろ）と卑しい名前にと改名させ、大隅国に配流した。’ 広虫は別部広虫売（わけべのひろむしめ）と卑しい名に改名させて備後国に配流した。 ・道鏡の故郷の「弓削行宮」を「由義宮（ゆげのみや)」として整備していたが、称徳天皇が滞在し、「由義宮」を副都として「西京」に位置づけた。この地で道鏡と楽しく過ごし、農民たちの歌や踊りに興じている。（政治への関心を失っていたのかも知れない。）

769 年	氷上志計志麻呂（ひかみのしけいしまろ）の変 称徳天皇の異母妹・不破内親王（ふわないしんのう）がその子・氷上志計志麻呂を帝位につけようとして、称徳天皇を呪詛したとの訴えがあり処罰されたが、称徳天皇が崩御した後の 771 年に訴えが誣告（ぶこく、故意に事実を偽って告げる）とされ、内親王は復帰。 母子は卑しい名前に改名されている。
770 年 8 月 4 日	・称徳天皇が平城京に戻った後、3 月半ばより病に臥せり、看病のために近づけたのは宮人（女官）の吉備由利（きびのゆり、吉備真備の姉妹か娘）だけで、道鏡は崩御するまで会うことは無かった。 ・道鏡は失脚し、軍事指揮権は太政官・藤原永手や右大臣・吉備真備に奪われてしまう。 8 月 4 日、皇嗣を決めないまま崩御。 その後、 ・道鏡は下野の薬師寺別当（長官）に追いやられる。 ・道鏡の弟・弓削浄人とその子・広房、広田、広津は捕らえられ、土佐国に配流された ・中臣習宣阿曽麻呂は左遷され、大隅国の国司に任じられた。
772 年	道鏡死去



橘三千代は文武天皇の乳母であったが、藤原不比等の後妻に入り、不比等の娘・宮子の文武天皇への売り込み、自らの娘・光明皇后の聖武天皇への売り込みに貢献したと伝えられる。(歴史作家の永井路子は‘日本一の売込みママ’とその著書に書いている)

4. 主な出来事の概要

⑴ 長屋王辛巳事件

長屋王は

父;高市皇子（天智天皇の子）

母；天明天皇

妻；吉備内親王（草壁皇子と天明天皇の間の子）で、この時左大臣に昇進していた。

聖武天皇が母である藤原宮子に「大夫人（たいふじん)」という尊称を与えると言う勅を出したが、左大臣・長屋王が撤回させ、「皇太夫人（こうたいふじん)」と改める。

長屋王はこれまで皇族系の皇統が続いていたのに、藤原系の聖武天皇が即位したことに不満を持つ分子の求心力的存在であった。藤原四兄弟と対立していく。

⑵ 長屋王の変

長屋王の使用人であった漆部造君足と中臣宮久東人が「長屋王が天皇の子・基王を呪い殺した」と密告。聖武天皇に兵をさし向けられ自害し、吉備内親王と息子たちとともに縊死した。吉備内親王は聖武天皇の叔母にあたり、3 人の息子達とともに皇位継承の可能性もあった。長屋王は無実であり、藤原氏の策謀と考えられている。

⑶皇太子交代事件

聖武天皇が跡継ぎのいない娘・孝謙天皇の為に道祖王（天武天皇の孫、新田部親

王の子）を皇太子とする。

「道祖王を皇太子にせよ」との聖武天皇の遺勅は候補者の中で藤原氏の血が濃い道祖王を選んだのは当然であり、聖武天皇は道祖王の人となりも承知した上で決定したと思われる。多少不具合な面があったにせよ、わずかな期間に皇太子の交代にまで繋がってしまったのは、仲麻呂が仕組んで孝謙天皇に働きかけたのではないかとの疑いが出る。その結果、未婚の女帝の潔癖感で、とてつもなく激怒して皇太子の交代劇に発展してしまったと思われる。仲麻呂の強い推薦で皇太子になった大炊王は仲麻呂の早世した長男の妻の再婚相手で、仲麻呂邸に同居していた。大炊王の父親・舎人親王は藤原寄りに傾斜し、結果的に藤原四子政権の成立に協力した人物と言われた背景がある。

この時期、孝謙天皇は従兄妹に当たる仲麻呂の自分に対する献身ぶりに全幅の信頼を寄せ、寵愛している。

⑷ 橘奈良麻呂の乱

・奈良麻呂の父・諸兄は聖武天皇の治世に政権を担当。天然痘の流行により、政権の中枢に他藤原四姉弟やその他の有力者が倒れ、返り咲く。大納言、ついで右大臣、左大臣に就任。息子・奈良麻呂も着々と出世し、野心を抱くようになる。次の皇太子が、仲麻呂の推す大炊王に決まったのを不満に思い、黄文王（きぶみおう、天武天皇野長男・高市皇子の孫）を擁立すべく、仲麻呂を除く謀反を企てるが、密告され、捕らえられる。獄死したと伝えられている。

⑸ 藤原仲麻呂の乱

① 要因

・仲麻呂は叔母の光明皇后の信任を得て大納言・紫微令・中衛中将に任じられ、台頭してくる

・孝謙天皇が即位すると孝謙天皇と光明子の権威を背景に事実上の最高の権力者になる。

・757 年 3 月、孝謙天皇が道祖王を廃位に追い込む。翌 4 月、仲麻呂は孝謙天皇に勧めて息子・真従の未亡人・粟田諸姉と結婚して仲麻呂の私邸に居住していた大炊王（おおいおう）を皇太子に立てることに成功。

・760 年 1 月、仲麻呂はついに人臣として史上初の太政大臣にまで登りつめる。

・しかし 760 年 6 月、光明子が死去したことでその権勢は陰りを見せ始める。

・仲麻呂と孝謙天皇のパイプ役になっていた仲麻呂の正室・藤原袁良古（おいらこ）を失ったことも大きな打撃であった。

・仲麻呂は淳仁天皇第 1 主義になり、孝謙天皇から離れていく。一方謙天皇は道

鏡を寵愛するようになる。

・仲麻呂の意向で淳仁天皇が孝謙天皇に道鏡を除くように働きかけるが、逆に怒りを買い、淳仁天皇は国の大事の決定権を奪われることになる。

②乱

・仲麻呂は軍事力の強化を図り、反乱を企てるが、密告される。

結果、仲麻呂は平城京を脱出し、近江国高島郡で最後の抵抗をするが、吉備真備等の官軍に攻め立てられ、舟で逃げようとするが捕らえられ斬首される。わずか

１週間前には仲麻呂は軍権を掌握して意気揚々たる状態だったが、不運な敗戦と誤算が相次ぎ、急転直下の滅亡となった。

⑹ 淳仁天皇の廃位

孝謙上皇は5位以上の官人を呼び出し、‘淳仁天皇が不孝であるとのことで、仏門に入って別居する。国家の大事である政務は自分が執る‘と宣言した。淳仁天応が仲麻呂の意を受けて、孝謙上皇に’道鏡を除くように‘進言したことが原因とされている。
道鏡や吉備真備（きびのまきび）を要職に就けた孝謙派と仲麻呂›淳仁天皇との勢力争いは続き対立を深めていった。
そして「藤原仲麻呂の乱」の後、地淳仁天皇は廃位され淡路国に流刑された。謎の死を遂げている。
孝謙上皇は復帰し、第48代・称徳天皇となる。
⑺ 和気王の謀反？
和気王は舎人親王系の後裔で唯一残っていた皇統。
祖父；舎人親王
父親；三原王
叔父；淳仁天皇
母親；不詳
・「藤原仲麻呂の乱」では仲麻呂が軍備を整えていると事前に上皇に伝える。その後、公卿に列せられる。
・淳仁天皇の廃位にあたっては中宮を取り囲む
・皇位を望んで謀反を計画したが露見して捕らえられ、配流の途中に絞殺される。
舎人親王系は復活できなかった。（淳仁天皇は和気王を後継に望んでいた？）
上皇側が舎人親王系の復活を阻止したとも伝わっている。
⑻ 宇佐神宮神託事件（道鏡事件）
① 事件の整理
事件に関し諸説あるということは決め手がないということだ。常識的には考えられないことであり、当事者の証言が残されていないので、後世さまざまな説、というより面白おかしい話が広がってしまった。
事件の直後
・和気清麻呂、和気広虫が称徳天皇の怒りを買い、それぞれ改名させられ、配流されている。
・道鏡は罰せられていないばかはりか、孝謙天皇は道鏡に益々接近している。
・神託を奏上した道鏡の弟・浄人と宇佐八幡宮の主神の中臣習宣阿曽麻呂は罰せられていない。
称徳天皇崩御後
・和気清麻呂、和気広虫は復帰している。
・道鏡は下野国の薬師寺別当（長官）に左遷

薬師寺は正式な僧尼を認める戒壇が設けられていたことで知られ、当時は奈良の東大寺と筑紫の観世音寺にしか設けられていなかった。左遷とはいえ、立派なお寺である。事件がなかったとした場合でも、妥当な役職かもしれない？
・中臣習宣阿曽麻呂は大隅国の国司に左遷。処罰ではないので神託事件では指示されただけと認められたのだろう。
・道鏡の弟・浄人とその子は土佐国に配流された。権力欲の処罰だろうが極刑ではない。
②疑問点
〇和気広虫が神託を受けるように孝謙天皇に指示されたとき、宣託について具体的な指示をもらっていたか？
〇和気広虫は病弱を理由に宇佐神宮行を辞退したが、辞退だけでなく弟・清麻呂を代行に推薦した理由は？
〇道鏡の弟・清人が宣託を報告しているが、その背景は？
〇道鏡は神託事件について事前に知っていたのか？
〇清麻呂が神託を持ち帰った後、何故卑しい名前に改名され、配流されたのか？
〇和気広虫は何故、卑しい名前に改名され配流されたのか？
〇最初の神託を持ち帰った浄人と主神は何故追及されなかったのか？
〇道鏡が天皇に即く話が消えてしまったのは何故か？清麻呂の持ち帰った神託を偽物とするなら、最初の神託を採用してもよいのに、そうしなかったのは何故だろうか？清麻呂を（偽物とし）処罰したが、持ち帰った神託を無視できなかったのだろうか？
〇道鏡は事件後も称徳天皇の寵愛を益々受けてさらに昇進している。
〇称徳天皇が崩御した後、浄人とその子たちは配流されたが、処刑はされていない。道鏡は左遷されただけで罰せられていない。後世の噂通りであれば、天皇崩御後廼朝廷内は敵だらけであり、当然極刑に処されていたはずだが、左遷されただけである。
後世の噂話（当時は無かった）
〇道鏡は臣下の身分で天皇になろうとした日本史上始まって以来の極悪人
〇道鏡の巨根伝説
〇孝謙天皇は果てしない愛欲の持ち主
であるが、ひとまず横に置いておいて今一度検討してみたい。

宇佐神宮

5．宇佐神宮神託事件から浮かび上がってくること

　称徳天皇は失望からくる怒りを抑えることが出来なくて、事件の背景を周囲に見透かされるのを承知の上で和気清麻呂と広虫を処罰した。弓削浄人や主神を罰しなかった。道鏡を益々寵愛した。

称徳天皇崩御後、道鏡は国司に左遷されているが、決して重い処分ではないし、浄人等も配流はされたが死罪ではない。道鏡は無欲でただひたすらに天皇に尽くし、称徳天皇の愛に報いようとしただけと解釈できる。浄人は兄を利用し、権力欲をほしいままにしたようにも思われる。のちに配流されているので、政権中枢にはそのように映っていたのだろう。

当時の史実らしきことから浮かび上がってくるのは

〇この筋書きを書いたのは称徳天皇であるとしか考えようがない。道鏡が加担していないことも知っているし、浄人や主神は自分の指示にしただけだと承知しているので罰することをしなかった。天皇の孤独のすき間に入り込み、権力欲を追い求めたのなら、極刑に値するはずである。処罰されなかったのは誰の眼にも道鏡が権力を求めたとは映らなかったのだ。

〇天皇は和気広虫には自分の意図を伝えていた。あるいは忖度できるような情報をほのめかしていた。しかるに、和気広虫と清麻呂が天皇の意図を阻止するために託宣を創ったのを知って、指示に従わなかったことに怒りを抑えられず、罰した。

〇天皇は仲麻呂が淳仁天皇に傾斜し自分から遠ざかったこと、母親の光明皇后が崩御したこと等によりストレスが募って病に伏せるようになったが、加持祈祷により心底看病してくれる道鏡に愛情を感じ、生涯一緒に暮らしたいと真剣に思い始めた。恐らく道鏡は高徳で無欲だったのだろう。その分、余計に愛おしく思ったのだろう。道鏡と添い遂げるには道鏡を天皇にし、自分は皇后になりたいと願うようになったと推測できる。そのために道鏡を昇進させた。身内になるかもしれない弟・浄人も親王並みに昇進させたのだろう。道鏡は天皇の寵愛に応えるために、天皇の申し出は何でも受け入れた。そのうち、自分も添い遂げられるなら天皇になりたいと思い始めた。そのうち周りからどのように映るか一は一切斟酌しなくなった。

〇由義宮旧祉碑

道鏡の郷里である若江郡（八尾市）を中心に広範囲にわたり由義宮が設営された。孝謙天皇は 770 年 2 月から 4 月にかけて道鏡を伴って由義宮に行幸し、崩御する少し前のつかの間の幸せな時間を過ごした。

（大阪府八尾市の由義神社境内に碑がある）

6．まとめ

（孝謙天皇に名前を統一）

仲麻呂は権力志向が強く、叔母の光明皇后に尽くし、皇后が崩御後は孝謙天皇に尽くし、淳仁天皇が即位すると淳仁天皇第一主義になる。孝謙天皇は仲麻呂を寵愛していたが、仲麻呂はそうではなかった。そして母親の光明皇后が崩御する。孝謙天皇の計り知れない孤独感が伝わってくる。

女性天皇は生涯未婚の女性か皇后（未亡人）に限られていた。特定の男性の操られるのを防ぐためと思われる。中世のスコットランドのメアリー女王は結婚もできたし、愛人を持つことが出来た。挙句の果てに愛人と謀議して夫を爆殺し、最後は従姉妹のイングランドのエリザベス女王に処刑された。エリザベス女王は結婚しなくても複数の愛人を持つことが出来た。御承知のように、現イギリス女王は結婚されている。女王も人間であり、当然認められるべきことなのだ。

〇孝謙天皇

日本の未婚の女帝は恋愛もできず、夫婦生活の経験もない、心を許すことできる息子や弟の後継がいない孤独感は計り知れないほどだったのだろう。貢献天皇は 40 歳を過ぎた頃に母親・光明皇を失い、信頼していた藤原仲麻呂は淳仁天皇第 1 主義になり自分から離れていき、孤独感が募ったためか、やがて病に伏せるようになる。そんな時に祈祷による治療で心底尽くしてくれた道鏡に急速に傾倒していった。恐らく身近に男性に接したのも初めてだろうし、野心が無く、ひたむきに尽くしてくれる道鏡に益々惹かれていった。一生、一緒に暮らしたという思いを抑えられなくなり、唯一の方法として、道鏡を天皇にすれば自分は皇后として晴れて夫婦生活を送ることが出来ると思い至ったのだろう。道鏡を護る為のあらゆる手段を講じた。

弓削浄人はこの状況を見ていて、孝謙天皇に道鏡を天皇に就ければ願いが成就できる。そのために宇佐神宮の神託を利用することをささやいたのかも知れないが、宇佐神宮神託事件は孝謙天皇が道鏡の弟・弓削浄人を利用して宇佐八幡宮に送り込み、「道鏡を天皇にする」という神託を奏上するように画策したと考えるのが妥当のようだ。道鏡には相談しなかっただろうし、道鏡の入れ知恵でもなかっただろう。弟・弓削浄人はのちに処罰されているので、積極的に神託を提案する等、天皇に取り入り権力欲を満たしていたのかも知れない。

神託を喜んだ天皇は周囲を納得させることが必要だったし、真相を確認するためとして宇佐神宮に使いを出すことになったが、側近の和気広虫なら、自分の意を忖度してくれるに違いないと思い、神託を受けにいくように広虫に指示するが、広虫は孝謙天皇の意図を察知し、これを使命感でもって阻止する。病弱で長旅に耐えられないとし、弟を代行させた。病弱なら孝謙天皇は最初から指名しなかっただろう。広虫はそれほどの病弱では無かったのかも知れない。もしそうなら病弱を理由に断るだけで良かったはずである。単に断るだけでなく、代行は気心の知れている弟でなればならなかったのだ。弟であれば上手くやってくれる。決して他の人に代行させられない。孝謙天皇の性格は知り尽くしているので、罰せられることを覚悟の上で、推薦したのだ。後世にいわれているように藤原氏からの働きかけがあったかもしれないが、処罰を覚悟した上で自分達の使命感で阻止を図ったのだろう。

怒りを抑えられない天皇は和気清麻呂と広虫を処罰した。

〇道鏡

道鏡が権力欲で天皇になろうとしたことでもなく、孝謙天皇の必死の願い全てを受けとめて、孝謙天皇を護るために、一緒に過ごせるようになるために自分が天皇になることを決心したのだろう。道鏡は周囲に何と思われようと、全てを受け入れようとしただけなのだ。

恋を一生禁じられている二人が中年になっての最初で最後の禁断の恋に落ち入り、周りにかまっていられなくなったとしても不思議ではない。後世の人は理解しがたいので、様々な勘繰りをして面白おかしく書きたてたのだろう。また、悪人は道鏡だけだとする風潮もあったからだろう。

〇最後に

天皇を譲位して、道鏡と一緒に過ごす方法は選択できなかったのか？
道鏡を護るためにも権威が必要であり、権威に執着した。また息子でも弟でもない後継者に引き継ぐことに、余人には計り知れないほどの恐怖感があったのだろう。皇太子の交代事件，天皇の廃位、皇太子候補者が謀反の疑いで捕縛されたこと、後継の皇太子は自ら決めるとしながら、皇太子を決めないまま崩御したことがそれを示している。（光仁天皇指名の遺宣は無かったとされている。）

強烈な性格も絡んでのことだろう。
　神託直後、和気姉弟だけが罰せられ、道鏡と浄人、それに主神にはお咎めが無かった。崩御後、和気姉弟は復権し、道鏡と主神は左遷だけで処罰されていない。浄人と息子は処罰されたが、極刑では無かった。政権の中枢では事件の実態と道鏡の人柄を承知していたからだろう。
　女帝は 53 歳で崩じるが、その直前、道鏡と由義宮（西京）で一緒に過ごしている。とても幸せなひと時だっただろう。
いずれにしても一人の女性の一生としては同情を禁じ得ない。

ついでに天武天皇系皇統の途絶えた要因も整理する。
天武天皇の皇子は 9 名いたが孝謙天皇で天武天皇の皇統は途絶えて、その後は天智天皇の皇統になった。
・草壁親王系
孝謙天皇の皇統である。
第 40 代天武天皇と第 41 代・持統天皇（天智天皇の娘）の子・草壁皇子が皇太子のまま死去する。草壁皇子と安倍皇女（天智天皇の異母妹）の子・軽皇子が第 42 代・文武天皇として即位。文武天皇と藤原宮子の子・首王（おびとおう、のちの聖武天皇）が幼いので、文武天皇の母親・安倍皇女が第 43 代・元明天皇となる。元明天皇の娘・氷高皇女が第 44 代・元正天皇となる。軽皇子が第 45 代・聖武天皇に即位。聖武天皇と光明皇后（藤原不比等の娘）の子・安倍内親王が第 46 代・孝謙天皇として即位する。跡継ぎがいなくて草壁皇子系は途絶える。
孝謙天皇の遺詔（本当は無かったとされる）として天智天皇系の光仁（こうにん）天皇が即位する。
・新田部親王系
新田部親王の父；天武天皇、母親；藤原鎌足の娘・五百重娘（いおえのいらつめ)。
新田部親王の皇子・道祖王（ふなどおう）が聖武天皇の遺詔により立太子するが、孝謙天皇により廃位される。橘奈良麻呂の乱で巻き添えをくらい、捕らえられ獄門死する。
・舎人親王系
舎人親王の母親；新田部皇女（持統天皇の異母妹)。
舎人親王と当麻山背（上総守当麻老の娘）の子・大炊王（のちの第 47 代・淳仁天皇）は道祖王失脚の後、立太子する。その頃、大炊王は仲麻呂の長男死去後、その夫人が大炊王の妻となり、大炊王は仲麻呂の屋敷に同居していた。

のちに淳仁天皇として即位するが、仲麻呂の乱後、孝謙天皇により廃され、流刑後に謎の死を遂げた。
舎人親王系の淳仁天皇が廃位した後、舎人親王系で唯一残っていた淳仁天皇の甥・和気王が謀反の疑いで捕らえられ、絞殺される。舎人親王系は途絶えた。
謀議があるとすれば上皇側と推測されている。
・高市皇子系
高市皇子の母親は宗形徳善娘・尼子娘。
太政大臣となる。
高市皇子と御名部皇女（おなべのひめみこ、天智天応の皇女）の子・長屋王は聖武天皇の治世下で右大臣となる。
謀反の密告があり、自害する。（長屋王の変）謀議が有ったとすれば藤原四兄弟の仕業か？
・大津皇子系
天武天皇と大田皇女（持統天皇の姉）の子・大田皇女が薨御し、後ろ盾を失くす。
686 年、大津皇子は謀反の密告をされて自害。謀議の有無は分からないが、その後、持統天皇が即位している。
　これらから推測すると、多くの後継候補者がいたからこそ潰し合い、また自分の子でもなければ信頼できない時代なので、自分の子でもない後継者への不安・恐怖心で後継者を育成しなかった、それに藤原氏の権力欲も絡んできて、天武天皇系の皇統が途絶えたようだ。
以上